男鹿潟上南秋医師会報

おだいじに

100号
令和３年４月30日

編集発行：男鹿潟上南秋医師会　http://oknmed.jp
〒010−0201 秋田県潟上市天王字上江川47−1616 ☎(018)878−7976 FAX(018)878−2517

目次

特集 会報三昧〜男鹿潟上南秋医師会報100号記念特集〜
・寄稿 森や林と暮らす　あゆかわのぼる（詩人） … 2
・書くことで過去を振り返り、今を考える―　吉成ひろ子 … 3
・「男鹿潟上南秋医師会報」と〝湖東病院〟　中鉢明彦 … 4
・会報と生涯教育講座　吉田賢志 … 6
・おめでとうございます　長谷川瑞代子 … 7
・医報発行の頃　浅利正雄 … 8
● 会長レター⑱　会長三昧　佐々木範明 … 9
● 笹尾知先生を偲んで
・恩師の手紙　笹尾　知 …10
・医師としての矜持 〜笹尾先生が私たちに遺したもの〜　神田　仁 …11
・笹尾知先生に感謝 ―30年の五城目生活を振り返って―　千葉裕一 …12
・追悼 笹尾知先生　中鉢明彦 …13
・浅利先生をどうするのですか？ 〜嘆きの狛犬さん〜　佐々木康雄 …14
● ふんふんコラム……15
● あれから10年… いざ釜石 〜緊急特集〜
・秋田県医師会・釜石救護隊第一陣（３月25〜27日）　小玉弘之 …16
・地震　笹尾　知 …17
・三陸・志津川 50年の時をへだてて　三浦　亮 …18
・潟上のご意見番
天災と人災 〜東日本の大災害に想う〜　佐々木宣明 …18
・11・３・11東日本大震災 〜災害医療に向き合う〜　佐々木康雄 …19
● おすすめの番組　肥田野文夫 …20
● 中村は生きています！　中村直文 …21
● 日本は遅れている？　大窪天三幸 …22
● 噂　肥田野文夫 …23
● 今日の診察室から㊾　秋元正年 …25
● ナイトキャップ……26
● 編集後記……27
● 表紙説明……28

会報三昧

男鹿潟上南秋医師会報100号記念特集

昭和63（1988）年3月の創刊号は全4ページ構成で、表紙に故畑沢実会長の挨拶、2と4ページ目に『男鹿市南秋田郡医師会をご存知ですか？』『とっさの時の救急知識』と題する活動案内、啓蒙記事が掲載されている。

日本医師会や県医師会の会報は読者を医師会員に限定した形式だが、当会報は初代編集長の故鹿嶋幸治先生（男鹿市北浦）の方針により最初から全国的に稀有な「一般読者向け」であった。鹿嶋先生の策略で19号（平成8年6月）から現編集長が担当、医師会名変更は69号（同25年6月）、愛称『おだいじに』登場は80号（同28年4月）、そして100号である。読者を代表しあゆかわ氏が会報の輪廻（？）に通じる森と水の循環について寄稿して下さった。会報の歴史探訪は次号以降としたい。

寄稿

森や林と暮らす

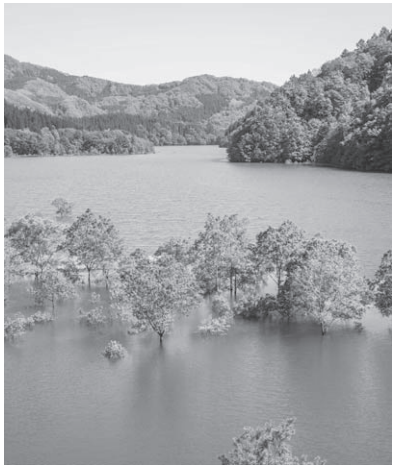
あゆかわ　のぼる（詩人）

一昨年の秋、ふと思い付いて豊川油田を見に行った。特別の理由はなかった。ぼんやりと自然の中を歩きたい、うまく行けば時代の少し後ろを歩いているような風景に出合えればいい、と思っただけだった。でも、思った以上の歴史の匂いと秋の風と自然がマッチしていて、いい所だなぁ、と感動し、時々レポートしているNHK仙台放送局のラジオで話し、毎日新聞東北版に書いているエッセイに付ける写真の撮影場所に選んだりした。

森や林と健康については幾つかの魅力的な記憶がある。

10年くらい前だったかしら。男鹿の森林組合の集まりに呼ばれて話をしに行った。会場が雑木林の中のちょっとした広場で、しかも集まりのタイトルが「美味しいハタハタを食べるために山に木を植えよう」という青空シンポジウムであった。お昼は焼いた干ハタハタと、女性部が作ったおにぎり。すっかり満足した一日だった。

私の生まれ故郷に清水森という小高い山がある。私の生まれた村は秋田県が国内産油のトップを誇っていた時代、県内有数の産油地で、村外れの山一帯に櫓（やぐら）や井戸、工場みたいな建物が多くあり、その清水森近くまであった。そこは子供たちの遊び場で、休みの日など、仲間で駆け回って遊んだものだった。たぶん村外れからの山道を30分くらい歩いた所に清水森があったがそこには畑や田圃があり、その一角1アールほどが休耕地で、そこで三角ベースや駆けっこをして、お昼には田や畑で働く大人たちとおにぎりを食べる



秋扇湖（玉川ダム・仙北市）

のが楽しかった。やがて、採算が合わなくなったとかで油田は閉じられ、田畑も休耕。今はどうなっているか分からない。

もう一つ。生まれ故郷の現在進行形の話をする。「健康の森」という。山林業を営む佐藤清太郎さんという人が、持ち山の一部を生態系を崩さないように整備し、四季折々（当然冬も）の山で楽しんでもらおうという取り組みをして30年になる。これを始めるにあたっては、老人医学の権威で村出身の大友英一先生のサゼスチョンを受け、亡くなられた日赤病院の元院長の竹本吉夫先生など県内の数人のお医者さんのアドバイスをいただいている。全国各地の人々がやってきて茸採りや栗拾い、斜面の滑り下り、池に入りドロンこになり、自然を満喫している。私もたまにふらりと出かける。

「森林浴」という言葉と行為が私たちの中に定着して久しいが、日常生活の中に入り込んでいるかどうかは、自らを振り返っておぼつかない。

「美味しいハタハタを食べるために山に植えた」若木の成長を見るために植樹した人たちが毎年出かけてみるとか、豊川油田の起伏に富んだ丘を歩いて遺跡や天然のアスファルトを見つけて感動するなど、森と林の恵みを頒けてもらって健やかに暮らす。出無精の私に向かって、「もう一度身の回りの自然を見つめてみよう」と呟いてみる。

書くことで過去を振り返り、今を考える―

藤原記念病院（潟上市）
吉成　ひろ子

祝！　100号ですね。私は今まで4、5回会報に掲載させてもらっています。おそらく最初に書いたのは、他県から秋田に転居して、訪問診療で天王、男鹿地区を回らせてもらい、自然の景色に感動したことだったと思います。春になると、椿、菜の花、藤の花、アカシアなど、桜以外にもたくさんの花々が目を楽しませてくれました。そして日本海の深い緑色、まっすぐな海岸線、セリオンからは男鹿半島を眺めることができました。

そのあとに書いたのは新城川の氾濫のことだったかと。大規模な氾濫で、下新城の田んぼがすべてつながり、海のように見えたことを今でも鮮明に覚えています。3年前にも我が町内は冠水しましたが、最初の氾濫の記事を載せた会報で編集長は「あそこは有名な水没地帯。なぜまた住むことにしたのか？」と書かれていましたね…。

今、医療に関して書くとすればコロナ抜きでは語れません。2020年から始まった流行のため、病院や診療所だけでなく訪問診療や訪問看護でも感染対策を余儀なくされました。とはいえ訪問診療は血圧測定や問診中心で、カテーテル交換や傷の処置の方がほとんどいなかったため、訪問宅出入りの際の手指消毒や、県外から訪れた方との接触が無いか確認すること等に気を配っていました。

その中で病院や施設が面会制限・禁止となり、自宅での療養や、自宅での看取りを希望する方が増えました。最後は自宅で過ごしたいと願う方や、病院で家族と会えずに過ごすのは可哀そうで、とか、県外の子供さんが会いに来たいと思っても、面会が許可されないから、など理由は様々でした。

入院中の方の関東在住の子供さんから「PCR検査を受けて陰性であれば面会が許可されるのか?」と聞かれたことがあります。感染初期には陽性反応が出ない場合があること、陰性とわかってからの移動中に感染する可能性があること等を考えると許可は出ないでしょうと説明するしかありませんでした。

一旦収まるかと思われたのですが、第2波、第3波、そして原稿を書いている3月末の時点では第4波の到来や変異株が話題になっています。幸いワクチンの効果が良いようなので、何とか一通り接種が終わるまで、診療上だけでなく日常の感染予防を心がけていきたいと思っています。

考えてみると、私にとって会報に原稿を寄せることは、自分の過去を振り返るだけでなく、今を考える良い機会になっています。編集長には、どうかこれからも会報をよろしくお願いしたいと思います。

「男鹿潟上南秋医師会報」と〝湖東病院〟

湖東厚生病院（八郎潟町）
院長　中鉢明彦

編集長より会報発行100号を記念し、病院代表として〝「会報と病院」について一文を〟と依頼がありました。当院にはいつも100部ほどの会報が届けられているようで各医師には1人1部、それぞれの部署にも1部ずつ配布して貰っています。そこで当院の職員がどの程度、医師会報に関心を持ってくれているのかについて簡単なアンケートをお願いしてみました。

締め切りまでわずか2日、年度末での急ぎ案件でしたが、思いのほか多くの回答が寄せられホッと一息といったところでした（結果は図1～4）。そして、各職種ともに興味と関心を持って会報を読んでくれているという結果は少なからず驚きでもありました。また、自由記載の中でも「医師の人柄が分かるような原稿で面白い」とか、「医師の気持ちを知ることができて親近感がわく」といった感想があげられており、院外の医師の書く文章に触れることで当院職員と医師会、そして医師会員との距離感が縮まる一つのきっかけになっている側面があることが覗えました。更に「院長の書いた所だけ読んでいる」という謎の選択肢にも、まさかの3票獲得、思わずニンマリ。

私自身はと言えば平成9年の第22号に初めて投稿（「ビバ・カンクン！～はじめての一人旅～」）させて貰ってから、これまで24年間に37回もの投稿を続けてきました。最初の頃は私生活や病院でのありふれた出来事をネタに一寸したペーソスを込めて、時には自虐的なタッチを交えて書き綴ったエッセイ風の読み物が十八番でした。

ところが平成22年4月、危機的な状況に陥っていた湖東総合病院の院長に就任してからは、そんなお気楽な文章を認める余裕はありません。就任直後の第58号（平成22年5月）では「いま湖東病院があぶない！」という特集を組んで頂きましたが、その中で多くの先生方からの激励文と共に私が職員に向けて語った院長就任挨拶の全文を掲載させて貰いました。翌年、東日本大震災が発災、〝湖東病院〟の行き先も、ますます不透明（真っ暗?）になる中で会報62号（平成23年5月）に「湖東

地区の医療崩壊を回避するために～身の丈にあった医療の姿を模索しながら～」、更に新病院建設に向けて動き始めた平成24年6月、会報66号に「秋田県で一番高齢者に優しい病院～21世紀的な『地域の病院』の姿を模索して～」を思いの丈を込めて記しました。〝湖東病院〟の将来像を模索する試行錯誤の中で、それを文章として纏めることによって目指すべき病院の具体的な姿が、より明確なイメージとして浮かび上がってきました。それを会報の主たる読者である住民の方々、そして当院職員にも提示することによりビジョンの共有を図ることができたのではないかと、振り返ってみて改めて感じています。新病院（今となっては聊か黴臭い響きの言葉？）建設が始まった平成25年からは「湖東病院Now」と題して7回にわたり新病院開院までの歩みを時系列で実況中継させて貰いました。この時ばかりは原稿を書きながら、いつもウキウキとした高揚感が湧き起こり、私にとって本当にかけがえのない時間でした（「湖東病院Now」は『秋田医報』と『全国厚生連病院長会ニュース』にも転載させて貰うオマケ付きとなりました）。

湖東厚生病院にとって、その誕生、それは想像を超える難産でしたが男鹿潟上南秋医師会報は、その誕生までの道程を支え続けてくれた見えざる大きな手のひとつだった気がします。それは、〝湖東病院〟に関わりのある多くの先生方から会報に寄せられた数多くの心温まる、時には厳しい眼差しの投稿文、そして私自身のいくつかの文章を読み返して今、一層そうした思いを強くしています。医師会報という紙媒体を通じて刻まれてきた〝湖東病院〟の様々な記憶、それが会報に対する当院職員の好意的なアンケート結果の背景に無意識的に潜んでいるような気がしてなりません。

図1 職種

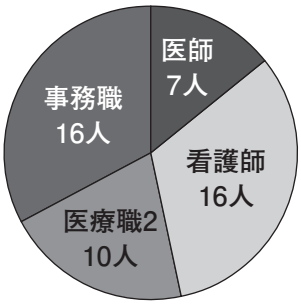


図2 男鹿潟上南秋医師会報について

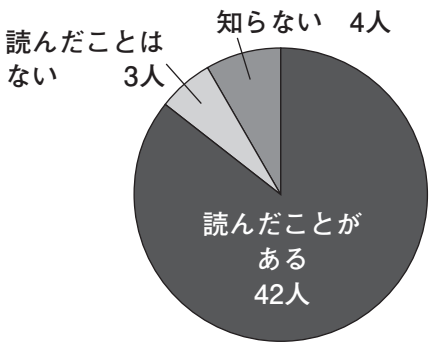


図3 読んだことがあると答えた方へ

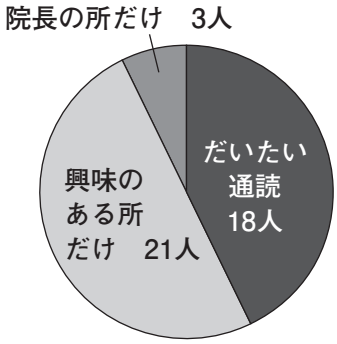
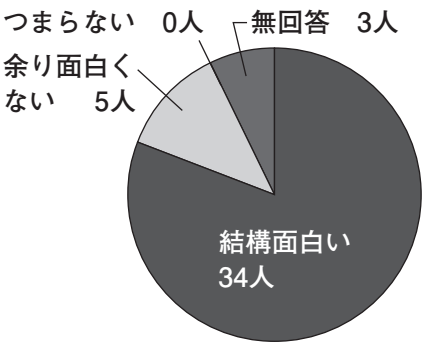


図4 読んだことがあると答えた方へ



会報と生涯教育講座

よしだ内科クリニック（男鹿市）
吉田賢志

当医師会では、会員の医療の質の向上を図る目的で、生涯教育に関する委員会が担当して毎月1回、年10回前後の生涯教育講座を企画・開催しています。県内外の著名な教授、准教授、講師の先生方や、県内の主な病院において第一線で活躍されている先生方をお招きして様々なジャンルの話題について分かりやすく御講演頂いています。会報委員会ではこれらの講演内容を整理して会報に掲載させて頂いております。

私個人としては、出席する講演会というと自分の専門に関連したものに偏りがちなのですが、当医師会の生涯教育講座に欠かさず出席することで、普段では聞く事がない他科の疾患について学ぶことができ、大変ためになっています。

さて、生涯教育講座の講演会の内容のまとめですが、以前はデジカメで撮影しておいたスライドと学生よろしく手書きでメモしたものを、後日、見比べながら記憶を辿って文章をまとめていました。現在は、デジカメで撮影しておいたスライドを見ながら、ICレコーダーに録音したものを文章に起こしてまとめています。1回の会報発行で2、3回分の講演会の内容をまとめますが、結構時間がかかります。

自分の中での方針としては、第一に講師の先生が伝えようとする内容をなるべく正確にまとめること、第二には講演会に参加した先生方には当日のまとめとなるように、事情で参加できなかった先生方には当日どのような講演があったのかわかるように、第三には当会報誌が一般の方の目にも触れるという性格上、講演会で扱った疾患について現在治療中の患者さん、現在治療中の患者さんを家族にもつ方の病気に対する理解の手助けとなるように、あるいはこれから症状が出た場合、早めに病気に気付いて早めに病院を受診する手助けになればとの思いでまとめていました。いきおい、文章が硬くて難解な点も多かったかと思います。

また、今考えると以前から問題だったかも知れませんが、スライドの撮影や講演会の録音が、講演者の著作権等や後援する製薬会社の利益を損ねる恐れのある不適切な行為だったかと思います。この場をお借りしてお詫び申し上げます。ただ、できるだけ正確にお伝えしたいという思いに免じて、また、内容については当会報以外には決して利用致しませんので今後とも何卒ご容赦頂ければ幸いです。

当日講演会に参加した先生方のまとめになるようにとは、少々おこがましいことだったかもしれません。今後は、講演者や後援製薬会社の利益を損なわない範囲で、一般の皆様をターゲットに講

演内容をお伝えして、疾患の早期発見（気づき）・早期受診に役立ててもらえるよう、ひいては早期診断・早期治療に繋がるようまとめていければと考えております。今後ともご愛読のほど、宜しくお願い申し上げます。

おめでとうございます

長谷川医院（男鹿市）
長谷川　瑞代子

昭和63年6月創刊から、33年の長きにわたり、休むことなく、発行されてきたことに、敬意と感謝の気持ちでいっぱいです。

初代編集長の鹿嶋幸治先生、2代目編集長の佐々木康雄先生の会報に懸ける思いやリーダーシップ、それに応え、毎号に貴重な文を寄稿された多くの先生方のご協力に、頭が下がります。

平成28年4月25日80号から会報タイトルが「おだいじに」となり、より一層、一般の方が親しみやすくなったと思います。

会報はとにかく、表紙から興味を引くようになっています。

素晴らしい写真、目次には誰もがわかりやすいタイトルが並びます。一般の方が読んでみようかなと思うように考えられていますよね。

私は、書くことが苦手で、非協力的な会員でした。すみません。

しかしながら、会報を読むことは楽しみでした。手元にある会報を取り出してみましたら、平成21年8月10日55号からありました。私は、昭和51年から平成18年3月まで、男鹿市立病院に勤務していましたので、なくなってしまった分は退職や引っ越しの際に処分してしまったようです。今、改めて創刊のころを思い起こしてみますと既にお亡くなりになった大先生方のお顔が浮かびます。男鹿市立病院就職時にお世話になった志田一豊先生、葛西亨先生。船川で開業されていた村上光彦先生、中村康文先生、古川先生、吉川昭男先生。脇本で開業されていた斉藤敏孝先生。北浦で開業されていた鹿嶋幸治先生。

鹿嶋先生は外科・内科・産婦人科等どんな患者さんでも診ていらして、多くの患者さんの信頼を得ていらっしゃいました。昭和51年4月から、男鹿市立病院産婦人科に一人科長として勤務した若輩者の私を心配して下さり、医師会の勉強会などでよく言葉をかけて下さいました。本当に懐かしいばかりです。

天王や昭和町（現・潟上市）の大先生は、医師会報を拝読し、勉強させていただきました。

私は、最近、医師会勉強会への参加が減り、「参加することに意義あり」精神が衰えてきています。

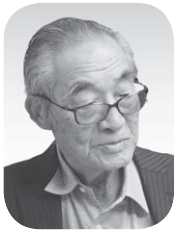
男鹿・潟上・湖東の病院等に新しい先生がいらしたことや、当医師会内での活動等は、医師会報で教えてもらい、当医師会

会員の仲間で良かったと感じています。ありがたいことです。

この会報が一般の方にも読まれていることについて、女性外来の看護師と受付職員に聞いてみました。「待合室に置いておくだけでなく、声掛けもしています。楽しみにして下さる方が多いですよ」と言っていました。

これからも、名編集長の下で、会報が続きますようにと願っています。

100号おめでとうございます。



医報発行の頃

杉山病院（潟上市）
浅利正雄

昭和58年開業、医師会理事に指名され、何故か広報委員になった。鹿嶋幸治先生に「ねぶた」と「ねぶた」の違いについて書くように指定され、本を調べて何とか書き上げた。

人物月旦（会員の人物紹介）では、最初は笹尾知先生、次は神田茂先生（後年、医師会長になられ雲の上の人のような存在であった）。中村先生が「神田先生のことを書くなど失礼じゃないか」という。私もとても無理と断わろうとした。すると鹿嶋先生に「浅利君、間違ってもいいんだよ、弔辞でないんだから」といわれ、まだそういう齢でもないのに緊張がとけて断わるタイミングを失い、酒飲みの席で神田先生に話を聞いた。

戦争で青春を踏みにじられた時代であった。台湾から出る船が故障したり搭乗する予定の飛行場が空襲で爆破されたりで、南方にも中国大陸への転戦も不可能となり、本土に生還したことにものすごく感動したことを覚えていると語っていた。

その後、編集は鹿嶋先生から佐々木康雄先生に替わったが、「組織（医師会）に参加したらできるだけ出席し、自分の意見を言うべきだ」と私が発言したこともあって最も「にがて」な文章を書くことを続けている。

神田茂先生、鹿嶋幸治先生、中村康文先生も故人となり、昔は若手だった笹尾知先生も最長老会員になった。

一言多い小生、コロナ禍について考えてみたい。

医療の「大企業」というべき病院は内部留保より借入金が多い。クラスター発生で収入は激減、職員の給与は借入金で支払うしかない。コロナで労働過重な時にボーナスを支払えないと200人もの看護師が退職しそうになった病院があった。病院は機能停止である。病院はライセンスが必要な職種が多い。欠員が出たら補充に大変苦労するし、できないことも少なくない。自然災害のようにはっきりした形でないが、人材確保の問題からより深刻で広範な医療崩壊が起こるのである。

（編注　この原稿を頂いたほぼ直後に笹尾先生が急逝。著者に追悼文をお願いしたところ、今はとても無理だと首を振って肩を落とされた）

ジオンとチコの花見
（北秋田市阿仁川）

会長レター 18

会長三昧

佐々木医院（潟上市）
佐々木　範明

男鹿潟上南秋医師会会報100号達成を心から喜んでおります。この偉業は創設された鹿嶋幸治先生のご尽力も然ることながら、それを継承されてここまで引っ張ってこられた2代目編集長のご努力の賜物と痛感しております。

ゼロ（無）から立ち上げて作り上げていくことには、大変な苦労があるわけですが、バトンタッチされ、それを維持発展させることはもっと大変だということを、2代目院長である小生も身に染みて感じております。1号1号、編集長と関係各位のご尽力が重なってたどり着いた100号だと思います。

大相撲春場所でまた優勝し、序二段から大関に昇進という史上最大の復活劇を決めた照ノ富士関も、表彰式の優勝インタビューで、序二段まで落ちた頃はどんな事を思っていましたかと聞かれ、「1日1日、コツコツと今やれる事を精一杯やるだけだと思っていました」と答えていました。この会報も、さらに号数をコツコツ積み上げていって欲しいと思います。皆様、これからもよろしくお願いします。

今年3月、東日本大震災から10年になりました。500年に一度とも1000年に一度とも言われる大災害でした。約1年前から始まった新型コロナ感染、治療法がないこの感染症の大流行も大災害と言えます。天災には立ち向かえませんが、コロナ大災害に私たちはやっと立ち向かえる武器とも言えるワクチンを手に入れました。このワクチンで新型コロナ感染を終息させる事ができるでしょう。ワクチンが潤沢に配布されることを前提に、接種事業を迅速に進め、いつもの日常生活、いつもの診察を取り戻し、そして経済の困窮状態から脱却しましょう。

三昧という言葉、広辞苑で調べてみると、梵語samadhiの音訳なのだそうで、三摩地・三摩堤とも訳すことがあり、「心が統一され安定した状態」「一つのことに心が専注された状態」…由緒正しきお言葉のようですが、名詞に付いて「一心不乱に仕事をするさま」（読書三昧など）「むやみやたらにするさま」（贅沢三昧など）となります。このワクチン接種事業をスムースに進めるため、今、日々下準備・根回しを進めています。行き詰まり途方にくれそうになることもありますが、1年後の春のために、今は会長三昧です。

さて、我が家の白柴犬「ケンシン」ですが、フリスビーの空中キャッチを仕込もうと画策していますが、ガジガジ噛んでいるだけで、なかなか飼い主の思い通りにはなりません。名犬に仕立てるには、まだまだ、コツコツおやつで釣りながらトレーニングですね。

ケンシン君

笹尾 知（さとる） 先生を偲んで

去る4月5日午前4時22分、当医師会元会長、笹尾知先生が秋田大学病院にて急逝された。昭和8年7月31日生まれ、享年87歳。ご葬儀は8日に八郎潟町の清源寺にて執り行われた。新型コロナ感染予防のため近親者による家族葬ではあったが、この菩提寺の筆頭総代など多くの役職を務められたこともあり大変な数の弔問客が訪れたという。

先日、ある70歳の五城目の方が、「兄も私も子供の頃ひどい喘息で、親が電話すると笹尾先生は夜中でもすぐ往診してくれました。私たちにとって先生は神様です」と目頭を押さえていた。

そんな先生を偲び追悼特集を組みたかった。しかし今号の原稿〆切が過ぎていたため広く呼びかけるのは難しく、有志に執筆を依頼した。冒頭に先生の随筆から印象に残る1篇を掲載する。

恩師の手紙

笹尾医院（五城目町）
笹尾　知

古い机の引き出しを整理していたら、出張先の福島県の病院をやめ父の跡を継いで開業しようとしていた時にもらった恩師からの手紙が出てきた。（中略）茶色に変色してしまった手紙を下さった先生は、慶應大学医学部の血液学教授、故長谷川弥人先生である。

先生は山形県寒河江の出身で、我々は大学医学部の時から講義を受けていた。その頃はまだ講師だった気がする。厳しい先生だった。今考えるとその厳しさは、内に本当の優しさを秘めた一種の照れ隠しのようなものだったと思う。（中略）

18、19才の急性骨髄性白血病の患者がいた。一時は副腎皮質ホルモンと6MPという抗がん剤の投与で治まっていたが、再発して入院していた。現在では治癒の可能性もある病気だが当時は不治の病だった。3晩も看護室に椅子を並べて仮眠し診察したが、激しい出血傾向と発熱のため、「先生、苦しい」と言いながら亡くなってしまった。

大学病院の習いで、亡くなった患者は病理解剖をしなければならない。医者になったばかりの無給の助手にとって強烈な経験だった。わけもなく涙が流れた。その後何十年も臨床医として働き多くの死と向き合ってき

たが、その若者の死が最大の体験だったと思う。

彼は当時の日本医師会会長・武見太郎氏の紹介患者だった。武見会長宛の報告書を書けと恩師から命令された。医師免許を貰ったばかりで経験の浅い若造には重すぎる役目だった。しかし怖いもの知らずで書き上げ、みてもらった。そしたら「全力を尽くしたと書いてあるね。君は本当に全力を尽くしたと言えるか」といわれた。自分では何日も徹夜で頑張ったつもりで、全力を尽くしたと書いたのだけれど、亡くなった方を思えばそれは単なる自己満足に過ぎないと教えられたのだと、暫くしてから気がついた。

私が開業したとき恩師から頂いた手紙に華岡青州の漢詩が書いてあった。日本で初めて麻酔下で外科手術をした人である。

竹屋粛然鳥雀喧
風光自適臥寒村
唯思起死回生術
何望軽装肥馬門

田舎で開業して貧乏暮らししても卑下することなく頑張れと励まして下さったのだと思う。教えるのも教わるのも、人間と人間の付きあいだった。

医師としての矜持
～笹尾先生が私たちに遺したもの～

神田医院（潟上市）
神田　仁

笹尾知先生の突然の訃報に接し、驚きと共に、まだまだご指導頂きたいことが多いだけにとても残念な思いで一杯です。

私が当医師会に入会したのは平成6年で、平成8年に笹尾先生が会長に就任され、私も理事として執行部に加えさせて頂きました。先生は負担の多い会長職を淡々とこなされ、しかもダンディな慶応ボーイらしく色々な会での挨拶もスマートで、すごいなと思ったものでした。

後の介護保険制度につながるモデル事業が五城目町で行われましたが、先生はその方面に甚だ詳しく、平成11年末に介護保険をテーマに開かれた第1回『地域の医療と福祉を考える集い』で、先生が「行き先が分からない飛行機を操縦するパイロットのような感じ」と発言されたことが強く印象に残っています。しかし先生は介護保険が始まると実に鮮やかに操縦し、特養『広青苑』でいち早く施設での看取りを始め、たとえ深夜でも入居者が亡くなるとすぐに駆けつけるという実践を最後まで貫かれました。

先生は警察医としても現役で活動を終えられました。今でこそ検案する時刻は概ね日中、場所も殆ど五城目署と限られていますが、以前は昼夜を問わない依頼に応じ現場へ赴きました。先生はこの会報に「まだ若い女性警官が深夜の寒い中、直立不動の姿勢で立っているのを見ると、自分が眠いなんて言っていられないと感じる」と書いておられます。

その背景にあったものは、医師としての使命感だったと思われます。奇しくも前号の99号で先生は救急車のない時代の往診のことを書かれましたが、現在とは比べようもない時代、患者さんに寄り添うことが原点だっ

たのでしょう。それは医療技術等が発達した現在も同じはずです。何回か訪れた笹尾医院の診察室は、最新の機器こそないものの、患者さんの話を聴き、目で状態を観察し、聴診器1本と自らの手の感触で診断する場でした。それは現代でも変わらぬ医の原点であり、わが医師会で先生に及ぶ人はいません。

コロナで大変な時代、多くの人に読まれたカミュの小説『ペスト』の中に、私が忘れられない、某新聞の社説でも取り上げられた新聞記者ランベールと医師リウーの会話があります。

「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」「誠実さって、どういうことです?」「一般的には知りませんがね。しかし僕の場合は…自分の職務を果たすことだと心得ています」先生もコロナに対して責務を果たそうとされ、PCR検体採取センターと市町村のワクチン集団接種に出務する予定でした。血液検体を山手線に乗って運んだ大学の医局時代から、コロナが席巻する現在に至るまで、笹尾先生は医師として、医療だけに限らず、本当に誠実に生きてこられたと感じております。1人1人ではとても真似は出来ませんが、医師としてのその矜持はみんなで受け継いでいかなければなりません。

笹尾先生、本当にありがとうございました。

笹尾知先生に感謝
―30年の五城目生活を振り返って―

千葉内科医院（五城目町）
千葉　裕一

このたびは笹尾先生の突然のご訃報に接し、ただただ驚いております。心より哀悼の意を表しますとともに、在りし日の先生との歳月を私なりに振り返ってみたいと思います。

笹尾先生に初めてお会いしたのは平成4年、私が故畑澤先生の医院を継承することが決まっていよいよ開業するという1週間前の夜でした。玄関から入ってすぐのお部屋で学童の心電図の判読の最中であったらしく、机の上に心電図が広げてありました。慶應のご出身らしく洒脱でありながらどこか凛としていて筋の通ったお話しをなさる先生、というのが私の第一印象でした。

当時は五城目町でもまだ子供の数が多く、幼稚園から小中学校までの健康診断はしばらく笹尾先生と私とで分担して行なっていました。その際、先生から具体的にご指導いただいて初めて知ったことが多々ありました。勤務医の頃は病院で心臓と肺疾患だけを専門に診療していれば良かったのですが、開業医となるとそんなことは言っていられません。例えば腹部の激しい痛みを訴えてきたのにもかかわらず腹部に大きな所見が無い時は、尿路の結石なども疑ったら、と優しく教えて下さったのを昨日のことのように覚えています。今のようなきちんとした研修医制度の無かった時代、笹尾先生から開業医の仕事を一から教えていただいたという訳です。

開業して数年経った頃、思うところあって現在の場所に医院を移転新築しましたが、普通の家庭に育った私のような者が億単位の借金をすることへの重圧があり、その上医局の先輩から

は郡市会長になるよう指示され、結果的に借金を返す為の医業が十分できないという不安もあって、私自身強いストレスを抱えた時期がありました。そんなとき夜のお酒の席に同伴させていただき、他愛のない会話で気持ちをほぐしていただいたことが何度もありました。私はあまり自分のことは他人に話したくない方で、たぶん気まぐれでわがままな人間だと思われたでしょうし、正直、わがままでした。そんな私が30年にも渡り五城目で医者を続けられたのは、笹尾先生の包容力のおかげだと思っています。

戦後生まれの私とは違い、笹尾先生のような戦争経験者は医師という仕事に向かう姿勢や公共の仕事に対する考え方に、確固としたものをお持ちであったと思います。ご高齢でありながら、本業の笹尾医院はもちろん、警察医、広青苑・森山荘の嘱託医など多くのお仕事を24時間フルタイムでお務めになっておられました。先生がいらっしゃらなくなった今、その十分の一、いや百分の一でも補えるように私も頑張るつもりです。

先生、長い間本当に有難うございました。開業医として尊敬できる先輩が身近にいて下さったことに深く感謝申し上げます。どうぞ安らかにお眠り下さいますようお祈り申し上げます。

合掌

追悼　笹尾知先生

湖東厚生病院（八郎潟町）
中鉢明彦

笹尾先生と最後にお会いしたのは、昨年の秋に秋田中央保健所で開催された、新型コロナとインフルエンザの同時流行に備えて発熱患者にどう対応するかについての会議の場でした。その会議の中で先生は「自分は高齢でもあるしコロナの可能性がある発熱患者を診ることはできない、しかし、そうした掲示を出していても診療所に入って来た患者を診ないという訳にもいかない」と苦しい胸の内を話されました。いつも通りの淡々とした口調でしたが、また随分とお疲れの様子にも見えました。

私は平成6年に湖東総合病院へ赴任しましたが、元来が酒好きということもあり近隣の開業の先生を迎えて開催される抄読会の後の懇親会では直（じき）に病院側の常連となりました。笹尾先生は当時、男鹿南秋田郡医師会長、私のような若輩者にとっては恐れ多い立場にありましたが、先生が以前に血液内科を専攻されていたこともあり専門を同じくする私に対して気さくに声を掛けてくれました（これには大窪天三幸先生の引き合わせの力も大きかった気がします）。酒の力もあってか、段々と臆せずに会話を交わせるようになり、そのうち笹尾先生と浅利正雄先生に連れられ毎度、二次会に「路傍」や「松鯉」まで足を延ばしては御馳走になるまでに成長（？）

しました。いつも静かに酒を嗜む先生の姿、そして穏やかな先生の語り口は今でも私の心に深く印象に残っています。

笹尾先生は自分の医院での診療だけでなく、地域の多くの介護・福祉施設の嘱託医を引き受けていました。その中でも特養『広青苑』では時代を先取りする形で、入所者の施設内看取りに地道に取り組んでいました。とりわけ湖東総合病院が病床を休止していた時期には老衰の過程にある超高齢の入所者を秋田市内の急性期病院へ搬送しないですむように、献身的ともいうべき奉仕的対応を続けられていました。そうした先生の医師としての日常の姿から滲みでてくる情が特養の職員に遍く浸透し、組織全体として温かい看取りの風土が醸成されていました。先生のこのような取り組みは、「平穏死」という言葉を提唱して有名になった慶応大学の後輩でもある石飛幸三先生の一歩先を行く先駆的な実践でした。

笹尾知先生、地域のかかりつけ医として、介護施設の嘱託医として、人生の最後まで愛する五城目町に寄り添い続けた先生の姿、その想いを心に刻み込みながら湖東厚生病院は、これから先もしっかりと湖東地域の医療を支え続けていきます。笹尾知先生、長い間、本当にお疲れ様でした、どうぞ安らかにお休み下さい。

浅利先生をどうするのですか？
～嘆きの狛犬さん～

ハートインクリニック（潟上市）
「おだいじに」編集長　佐々木　康雄

秋田生まれの医師で俳人だった石井露月に「霹靂として神去りましぬ夏の雲」という句があります。私たち編集委員会、また誰よりも浅利正雄先生は今「霹靂として友去りましぬ花曇り」と悲嘆のどん底です。

笹尾先生は頼まれれば嫌と言えないご気性のため、引き受けられた数多の役職とその業績は枚挙にいとまがありません。当会報にとってもかけがえのない存在で、常に品のあるエッセイで巻頭を飾って頂きました。満州からの引き揚げ体験、医療や医師会の歴史と現状分析、展望を語るその筆致には、やや斜に構えたユーモアと、時にほんのり色香も漂わせていました。チャーチルは「歴史を作る最良の方法はそれを書くこと」と述べたそうですが、先生は会報でそれを実践されました。こんな素晴らしい書き手を喪った会報の行く末が心配です。

私には忘れられない思い出があります。秋田市と周辺の救急救命士たちが医師にだけ許される気管内挿管を行っているとマスコミが騒いだ10年ほど前、県医師会も彼らを非難する声が大半でした。義憤に駆られた私は救命士側に立った反論を投稿したのですが、ある会議の折、当時の笹尾会長から話があると難しい顔で呼び止められ、「県医師会からこんなものが届いた」と1枚の文書を示されました。救命士の違法行為を容認する会員を注意せよといった内容で、ところが先生は突然あの大黒様のような笑顔になり、「バカな話だね。救命士の挿管を国が認めるのは時間の問題なのに」と

その紙を引き裂いてポイとゴミ箱に捨ててしまったのです。これが生粋の慶応ボーイかと私は深い感銘を受けました。

２０１５年４月の会報76号に『免許証』という先生の一文があります。「１９８０年に死亡した父は医師免許を55年間持っていたことになる。私も丁度同じになった。もう少し記録を伸ばせそうなので、死んで父に会うことができたら自慢してやりたいと思う」と結んでおられました。先生、天国でお父上にたっぷりご自慢なさって下さい。

それはさておき、ご遺族には恐縮ながら、問題は先生に取り残された浅利正雄先生です。酒席で盃を交わすお２人、息を吸う一瞬以外は喋り通しの浅利先生と、口をつぐんでフンフン頷きながら耳を傾ける笹尾先生との光景は「あ・うん」の狛犬さんでした。主治医と無二の友と言葉まで失って途方に暮れている浅利先生は、今後その辺を漂う千の風になった先生に語るしかありません。おいたわしや…ですがこの際、笹尾先生に代わり私たちが耳になりましょう。生前一度も検診を受けなかった先生、あの世では今度こそ「おだいじに」！

気球に乗って笹尾先生に会いに行きましょう！
（平鹿スカイフェスタ）

column

ふんふんコラム

大阪の新型コロナ

愚痴聞いてくでぇ～。新型コロナ、近畿圏では3月29日現在、確実に増えとる。身をもって感じるわ。12月は滅茶多かったけど、1月の緊急事態宣言後は激減し、当院でもＰＣＲ検査陽性はず～とゼロやった。ところが今日３人(16、23、24歳)検査して1人陽性。みな若く、外に出て遊びまくっとるんや。16の女子は母親と外車で来院、「先生、うちの娘は性感染症もあると睨んでるんや。ついでにその方の検査もしてくれへん?」と言いよった。23の陽性男は鼻咽頭検査の際、咳をしまくりよった…小生にうつるやろ、くっそう！　先週の陽性者も18の女子。友達4人で2日間遊んだそうな。周囲の高齢者はみな自粛。若者は出まくっとる。地域医療、自分の信条とはいえ…診たくなくなるわ。コロナワクチン接種、早よしてくれ～。大阪市の診療所は4月後半から、5月中には何とかと…そんなん遅いわ！

4月14日、感染爆発寸前を肌で感じている。診療所の目と鼻の先にある小学校で教職員16人がＰＣＲ陽性、2週間先まで休校。周辺の塾、算盤教室も休みになったとか。小院でも毎週のように陽性が出て、今夜も帰宅しようとしたら近所の人から「家庭教師の先生が陽性になったので診てほしい」って電話。

天気の良い土日の公園は人で溢れ、子供たちはサッカー、大人たちはお喋りに夢中。コンビニには小中高生がたむろしている。みな感染爆発寸前であることを全く自覚していない様子。まだまだ患者増えるよね～。

発熱外来しているのにコロナワクチン接種はまだ。医療従事者対象の接種券も届いてない。当地でも大病院職員は接種完了しているけど、診療所は知る限り皆無。何してまんねん!!

（大阪のふんころがし）

あれから10年…

今から10年前に発生した東日本大震災。津波、原発事故で世界が騒然とする中、左記のような前文をもって当会報62号は特集を組み、翌4月に発行された。今回100号にちなみ、その中から数篇を再掲する。

いざ釜石 ～緊急特集～

平成23（2011）年3月11日午後2時46分、M9の大地震とそれに続く大津波。東北太平洋沿岸の被災は東電福島第1原発から未曾有の事故に拡がってしまった。「東日本大震災」である。さあ一大事！ 日本医師会と秋田県医師会が指定した医療支援先へ、当会員たちも、いざ（鎌倉ならぬ）釜石！

秋田県医師会・釜石救護隊第一陣（3月25～27日）

南秋田整形外科（潟上市）
（現・県医師会長）小 玉 弘 之

3月25日午前5時、秋田県医師会館を出発。前線基地である遠野市平澤屋旅館着8時前。打ち合わせ後、釜石市内へ。全国の日赤と自衛隊が主役で、釜石シープラザで同市医師会の寺田会長が陣頭指揮を執っていた。

秋田班は避難所の市民交流センター、松原地区コミュニティセンターなど3地区を担当。交流センターでは玄関に簡単な衝立で囲ったコーナーで午前約30名の診察。避難所往診5名。1人当たりの診察時間が長く下痢と風邪が多い。「自己完結型」なので昼食は自分の車の中でお握り。水は潤沢に持参すべき。

午後の松原地区はひどい混雑で診察コーナーを囲うカーテンも衝立もプライバシーも何もない。避難所内に動かない老人がいた。ケアマネに紹介し介護施設を手配。とにかくみな元気がない。やはり下痢と風邪が多い。3番目の地区は150世帯のうち100世帯が津波に流され、残った数世帯へ往診。高齢の両親と暮らす統合失調症患者がいて、薬もなく不穏状態だった。専門病院へ移送。疲労の色濃い両親も内科へ入院となる。（中略）

初期は遺体検案のため検視医が大量に必要とされ、岩手医大法医学部が中心になった。宮城県警は震災直後の12日に検視医を各地に要請した。必要性を即座に認識したのであろう。

被災者や現地の医師は、県外の元気な支援隊に勇気づけられ

刺巻湿原（仙北市4月23日）

る。それほど現場は暗いムードで、これではいけないと秋田県チームは遠野市の焼肉屋に集まって呑んだ。遠野は肉の名産地。殊に河童（かっぱ）はいける。ぜひ寄って英気を養って頂きたい。

地震

笹尾医院（五城目町）
笹尾　知

地震が起きた時、私は五城目町の養護老人ホームの医務室にいた。高齢女性が熱を出したので抗生剤入り点滴の針を刺し固定していた時、突然、携帯が激しくピーピー鳴りだした。何事かと見ると緊急地震情報だった。10秒くらいしたらグラグラ激しく揺れ一瞬外へ逃げた方が…と思ったけれど、患者さんを置き去りにしてはと思い直した。随分長い間揺れていたように思う。（中略）

私が福島県須賀川市の病院に勤めていた頃、新潟地震があった。ちょうど昼食の時間で、何人かのドクターといっしょに病院の賄い食をとっていた。大正時代の古い木造二階の畳敷きの部屋はぐらぐら揺れ、私以外の人はみな外へ逃げた。病棟で診察していた先輩も患者さんをほったらかしにして逃げたと評判になった。もし自分がそんな立場になっていたらどうしていただろうと考えたものである。（中略）

終戦の時、私は6年生で満州の鐵嶺というところにいた。（中略）終戦と同時に満州にいた何十万人かの日本人は難民になってしまった。避難場所もなく、援助物資もなく、ましてや情報は誰も持っていなかった。停電したままなのでラジオも聴けず、子供達には遊びの時間がいっぱいあった。放置されていた手榴弾をいじって爆発し片足の膝から下を切断した友達もいた。今のカンボジアやイラクの子供が地雷を踏むのと同じである。風呂に半年も入らず下着を替える事もなかったので虱がたかった。（中略）

今テレビを見ていると、被災した小さな子供にまで頑張りますと云わせている。我々は学校に行けなくても、頑張りますなんて云わなかった。子供は学校が休みの方が嬉しいのである。長い停電の夜、ローソクの明かりでふとんから頭を出して、貸本屋で借りた吉川英治の宮本武蔵とか多くの本を読んだ。中には子供が読むには少し際どいのもあったけれど、今のコミックなどに比べればずっと大人しいものだったと思う。人の成長には勉強だけでない色々な時間が必要だ。災害にあった子供達は大変だと思うけれど、長い人生を生きて行く上で、貴重な経験をしたと振り返ることがあるかもしれない。（後略）

三陸・志津川 50年の時をへだてて

社会福祉法人敬仁会（潟上市）
施設長　三　浦　亮

1960年5月23日、南米チリでマグニチュード8・5の地震発生。24時間かけて太平洋を越え、三陸海岸に津波襲来。当時、私は国立仙台病院でインターンとして研修していた。医学士ながら医師の資格はなく、先輩の指示で走りまわる毎日であった。1年の研修期間中2ヵ月の地域病院実習があり、私は7、8月に志津川の病院に行く予定であった。5月にはすでに同期の研修生が志津川に赴いており、津波襲来の報が入ると安否が気遣われたが、午後2時すぎ、無事との連絡が入った。

志津川に最初に赴いた同級生は女性。100名足らずの同級生中、女性は4名のみ。いずれも一騎当千の人材ぞろい。彼女は100名余の死者を出した志津川で、そのまま研修を続けた。

6月30日、私は志津川に入ったが、学生時代に訪れた景色と様変わり、バスの車窓からも被害の跡は生々しい。（中略）

内科外来の壁には2mほどの津波の跡が残り、病院内に寝泊りしていた同級生は、国家試験に必要なノート、教科書などすべて水浸しで使い物にならなくなった由。津波直後から野戦病院さながらの救護、診療、力仕事の雑用まで、同級生は獅子奮迅の活躍だったらしく、複数の職員から「あの先生のことは、私達がいる限りずっと語り継がれて記憶に残るでしょう」と聞かされた。（中略）

時は流れて50年、本年3月11日午後2時46分、震度5強の地震が秋田を襲った。（中略）

翌日、電気が復旧しテレビが放映されたが、宮城、福島、岩手の惨状と津波の凄まじさに息を呑んだ。志津川病院の4階まで水があがり、病院内でも多数の方が亡くなられている。南三陸町のみでも判明している死者は半世紀前の10倍。さらに山田町、釜石市、石巻市、いわき市など、若い時に診療を行った病院、地域の甚大な被害に呆然とするばかり。（中略）

人は自らおかれた立場で、期待される責務、役割を全力で果たすしかない。天を畏れ、かつ祈るのみである。

潟上のご意見番

天災と人災 ～東日本の大災害に想う～

佐々木医院（潟上市）
佐々木　宣　明

東日本大地震に併って発生した大津波による惨状の報道を見るや「神も仏もあるものか」という感慨に襲われたが、その後、逐一状況が報道されるに及び、なんでこんな凄い事になってしまったのだろうと恐怖を覚えるしか無かった。

地球は10数枚のプレートに覆われており、これが少しずつ移動するという大陸大移動説が定説になっており、プレート同士が重なり合って下に潜ったプレートが反発して地震がおきる事も定説になっている。人力ではこれを防ぐ事は勿論、予知も困難な大自然のなすがままの天災である。

しかし今回の津波に関しては対策が全く不充分であったと言える。三陸地方はその地形のためか昔から何回も津波の被害を受けている。歴史的には869（貞観11）年に発生した津波の痕跡は海岸から3～4㎞に達しておりM8・3と推定されている。1896（明治29）年の三陸大津波では波高38・2mが計測され数千人の死者が出た。1960（昭和35）年チリ地震から太平洋を押し寄せた津波でさえも200名位の犠牲者が生じている。「愚者は事象に学び賢者は歴史に学ぶ」という言葉があるが、歴史的に多くの津波の事例があり参考になった筈なのに、充分な対策も無く大被害を生じたのは、人災というより仕方がない。

東電福島第1原発は今、大変な状況になっているが、5・7mの波に耐えられる設計になっており実際には15mの津波に襲われ大打撃を受けている。防潮堤も各所に設けられていたが5・5m位しか無く津波は軽々と越えている。宮古市田老地区では津波の遡上高が約38mに達し恐るべき破壊力を示した。津波でなぎ倒された市街地を見ると津波が来る予測等は全く考慮に入れず建設したのであろう。

第2次世界大戦で日本の大都市は焼野原となり原爆の被害も受けたが見事に復興を果たした。今回の被災地もやがて復興するであろうが、問題は又いつ発生するか判らない津波対策である。被害箇所に又建設する様な馬鹿な事はしないと思うが、国も自治体も計画を密に万全の対策を講じて再建していただきたい。

松島湾では多数の小島が津波の力を弱め被害が少なくてすんだという事である。湾口に人工の島を多数設置する案は如何であろうか。

牛（佐々木医院の庭）

11・3・11東日本大震災
～災害医療に向き合う～

ハートインクリニック（潟上市）
佐々木　康　雄

（魁新聞フリーペーパー・マリマリ「輝きの処方箋」33回）

「うちのナマズは動いた。お宅のカメは？」ナマズ地震予知を試みている友人から3月11日夕、メールが届いた。だがうちの亀のカメ子はいつも肝心な時に姿を見せない。

83年の秋田沖大地震ではナマズもへったくれもなかった。ある病院のレントゲン室で大腸検査中、ドーンと全身を突き上げ

られた。肛門にチューブが入った患者と抱き合って恐怖に耐えたが、揺れが収まって駐車場に目をやると院長と副院長が裸足で立っている。院内に留まった職員たちも、エライというより動けなかったのが本音で、尻に管を突っ込んだ患者を置き去りにしていたら、私とて今ごろ秋田にいられたかどうか。

それでも咳払い一つで院長と副院長は院内に戻り業務を続けた。当時は心電図と人工呼吸器は数が少なく手術場優先で、AEDもない。超音波検査も先輩医師と一緒に試行錯誤中、夜間救急の患者にナースが薬を薬包紙に包んで渡していた時代である。この病院にCTやパソコンが入るのはまだ先の話だ。

医療の限界を住民も理解していた28年前と今は違う。今回は停電により大病院は相次いで救急受け入れを断念した。オール電化では仕方がない。職員総動員で門を開けておけないかとも思うが、診察し、医療機器が動かず治療に不備あらば病院が訴えられるご時世である。

「地震に驚いて、やっと回復したテレビを見て怖くなり、体が揺れ、眠れない、訳もなく涙が流れて…」そんな患者の声とは裏腹に県医師会からのFAX第一報は「検視医募集」だった。生存者を診るより遺体確認の医師が必要とは…。キャンプ用ガスで暖を取っていたらカメ子がのこのこ現れた。万年生きる奴は違う。〈2011／3／25〉

マーガレット
（ブルーメッセ）

おすすめの番組

NHK「ここは今から倫理です」

杉山病院（潟上市）
肥田野　文　夫

前号は身体科の医師の精神科治療への勘違いを書きましたが、医者でもああですから普通の方々はもっと凄まじいのです。脳疾患後の後遺症では「何とか良くならないでしょうか？」⇔「脳が障害を受けてしまったので治りません」のエンドレス面接などは患者さんだからまあしょうがないとして、例えば教育や福祉に携わる一部の方々の精神科への理解のなさは恐ろしいほどで、先日はついにキレてしまったのでその話をします。

某学校からの相談で、詳細は省きますが「予後不良の精神疾患です。薬物療法・精神療法その他治療法はありません」とお伝えしてわかって頂いたと思ったのが間違いで、それから学校から家族に「病気なのでとにかく至急受診して下さい」と矢のような催促が届くようになりました。子ども自体は全く拒否的で親の言うことなど絶対受け入れないので、ほとほと困り果てているのに「受診しましたか？いつ行かれますか？」と追及は続きます。

結局、家族が「相談」という形でみえられ、この病気は現代医学でも原因不明、進行性で原状回復不能（軽快することはな

い）、治療法も一切ないことを説明させて頂きました。そしたら、「実は、学校から『薬を飲めば良くなる』と言われたのですが…」で、涙ぐまれ、この子を見ていてこれはこのままで変わらずずっと続くのだろうと覚悟していたのです…でさすがの（？）私も頭に血が上り、脳出血直前になりました。

「精神科の病気」だからといって必ず医者に行かなければいけない、というのがまずおかしい（かかっていないおかしな人はたくさんいる）し、病気だから薬を飲めば良くなる（末期癌、難病の神経疾患などは医療は無力）というのもどこから見ても妄想です。研修中の若手の熱意（？）と穏便に解釈できないではありませんが、それを教育するのが経験のある先輩の役割で（やりたければセカンドオピニオンでもなんでも）、「治療がない」と確診したものを「治療して下さい」は、あなたに治療が必要（いや不要）です。モンスター生徒・親との関わりが大変なのはわかりますが何も自分（たち）が「解決妄想」を持たなくてもいいでしょう。

最近のテレビは低俗すぎて見るに堪えませんが完結したＮＨＫ（にしては素晴らしい!!）の土曜夜ドラの『ここは今から倫理です』は、現在の学校の問題をきれい事で済まさず、ひきこもり、校内暴力、いじめ、リストカット（自傷）、スマホ、性の問題などを題材に、教師役の山田裕貴がお決まりの安易な美談に流れず、生徒たちと倫理学を通じて生きていく悩み、苦しみを考えていくというお話です。ぜひ、オンデマンドでの視聴をお勧めします。

すべての人に次々と押し寄せ繰り返される日常の難題は結論も解決もなく、夢を持たせるだけの根拠のない希望はすぐに絶望に置き換わります。「少しでも良い方向に」「人間は成長の可能性が常にある」のでしょうが、「何かしなければ」は強迫観念で、本心が善意・真心だとしても、それはほとんど人を傷つける結果にしかならず、どうしてもあきらめなければいけないこともあり、そっとしておいてあげる…それも「寄り添う」ことでもあるのです。

中村は生きています！

湘南健友会長岡病院（神奈川県）
中　村　直　文
（元・男鹿市中村医院）

ごぶさたしております。この度編集長から原稿の依頼があり、駄文を寄稿することと相成りました。毎回送って頂いている会報を懐かしく拝読しております。

当地へ転居して2年近く、サラリーマン気取りの電車通勤にもようやく馴れ、乗客を観察するのが日々の暇つぶし。ほとんどの乗客は居眠りをしているか、とりつかれたように携帯に見入っている。ゴホンと咳でもしようものなら冷たい視線が向けられる始末で、全く嫌なご時世となったものである。

病院は、茅ケ崎のイメージである海とは程遠い山里の趣のある場所に建っています。仕事は

午前9時～11時半、午後1時半～4時、週休土日2日で開業医時代よりだいぶ緩い感じです。一般外来、健診、内視鏡検査を受け持ち、その他、発熱外来、コビット（新型コロナ）会議、コビット19ワクチン接種準備会議の責任者をやらされています（本当に面倒臭い限りなのであります）。

近隣には茅ケ崎市立病院、茅ケ崎徳州会病院、茅ケ崎東部病院、平塚市民病院、平塚共済病院、済生会湘南平塚病院などの他に開業医院も多数あります。

昨年5月にこんなことがありました。健診で心電図上ST低下が認められた職員がいて、本人にしかるべき施設の専門医にて精査が必要と結果を告げたところ、本人が納得せず、近くの開業医を受診、その先生からこんな返事が送付されてきました。「ST部分は多少異常な形を見せているが、これはSagging STといわれるnormal variantと判断され、健康保険でホルター心電図検査を実施するのは困難かと…」

鳥海山と菜の花畑

なんだこれは、ただ者ではないと思い調べたところ、何と『不整脈の診方と治療』の著者である五十嵐正男先生88才その人でありました。こんなところ（茅ケ崎市）で開業医をなさっておられたのかと驚きと共に己の勉強不足に恥じ入るばかりでありました。しかも文末に、「もし何かの理由でそちらの病院で特にご希望でしたら喜んでご意向に添いたく存じます」とあった。これはもう誠に恐れ入ります、である。いつかお目にかかりたいと思っているが、いまだに実現していない。

ところで、男鹿では既に私はあの世に行ったことになっていると聞いて失笑してしまった。人の噂は倍になる。恋と噂話は一番お茶を美味しくさせる。とはいえ、話題がないんだな…。

かの地で私は死んでいるのだ。死がなければ生はない。生があるから死があるのだ。生きているものは必ず死ぬ。先のことは分からない。これが人生における最大の当たり前。即ち「常識」である。こんな言葉が頭に浮かんだ。まあ、暇つぶしの話題提供というところか。

朝な夕な姿を変える富士山を眺め、男鹿の風景を思い出しながら贅沢な時間を過ごしている。私は茅ヶ崎で生きています！

日本は遅れている？

大窪胃腸科内科医院（五城目町）
大　窪　天三幸

そうは思いたくないが、やはり日本は遅れている。今さら日本学術会議の話を蒸し返したくはないけれど、菅内閣はコロナ対策については医学者の意見を参考にし、無視している。

彼の言葉に「考えに考えて…」というのがある。結局は彼は泥にまみれ、汚れた政界の駆け引きの中で経験してきた学問的知識とはほど遠い見識の中で、彼なりに熟慮して決断を出す哀れな老人に過ぎないわけだが、このコロナ対策だけでも後手後手で第４波が始まっているのに、まだ過去３回の総括ができていない。

本荘鶴舞公園（今年４月10日）

国民はこの首相には期待するのが無理だと分かっているはずだが、大きな抗議の声は上がらない。長期安倍政権が成功した国民総白痴化のおかげである。やり場のない国民は野党のせいにするが、国民が野党になりきれていないのだと思う。自由を求め命がけで軍政と戦っているミャンマー国民や香港の人々を見習うがいい。

日本は経済では第３位というが、医療、とりわけコロナに関しては後進国になってしまった。そのほかにも女性経営者、女性の政治家、社会的地位、学問その他の分野でも世界の後進国になってしまった。私は日本学術会議の問題から、この首相は変だと思っていたが案の定だ。

私は訴えたいことが山ほどあるが、この文章を作成時に悲しい知らせが入ってきた。笹尾知先生の逝去である。身体の力が抜けるようであった。

３月に体調を崩し入院されたとか。４月３日、笹尾医院の貼り紙に４月24日まで休診とあった。来週になったら先生の手伝いでもと考えていた矢先の５日朝、医師会から訃報のＦＡＸが届いた。なんとも残念である。

１９７６年、私が湖東病院に赴任した時からの付き合いである。勉強会、麻雀、カラオケ、ロータリークラブ、学校健診などいろいろお世話になった。また長年、警察医、学校保健でも特に障害者児童のための会、また老健施設長、市神祭（いちがみさい）など社会的にも多大な貢献をされた。いかに感謝してもしきれないくらいである。いまは先生の御冥福を祈るばかりです。笹尾先生、本当に長い間ありがとうございました。

※医師会報としては雑になってしまったことをお詫びいたします。

噂

杉山病院（潟上市）
肥田野　文　夫

いつも同じような話題で、読む方もあきれるでしょうが少々お付き合い下さい。昔から「人の口に戸は立てられぬ」のですが、噂というか人はずいぶんと勝手なことをしゃべるものです。前に小中学校心身ともに「特に心」虚弱児だったと書きましたが、10才頃から、いじめ、からかい、恐喝まがい、先

生からもバカにされると、どうつくろっても（愛想笑いをしたり、ちょっとしたもの―高い鉛筆とか弁当のおかずとか―をあげて気にいられようとしても）何も変わらないので、６年生の卒業文集のお題を「人を信じないように、人を頼りにしないように」としたらさすがに母親が学校に呼ばれました。

長じて秋田に都落ちしてから、ここの人は故郷と違って穏やかでやさしい…と思って陸の孤島も悪くないな、としばらくは感じていましたが、何か変というか妙な距離感がわかるようになりました。例えば、どんなに親しそうにみえても、何かの集まりに声をかけてもらえない、お願い事（郵便物を預かってもらうとか）をやんわりと断わられるのです。何も悪いことはしていないのに仲間に入れてもらえない、それでいて、まるで被害妄想ですが周りはこちらをずっと見ていて、自分がいつ帰宅したか、誰と会ったかを知っている、知らなくても聞きたがる、のです。多分よそ者だからでしょうが、閉塞感を感じてとても息苦しいのです。

みんなが、知り合いはもちろん、知らない人のことまで詳しくて、あそこの子どもがどこに勤めていて、どこに嫁に行って、つかまっただの、うまくいってないだの、よくもまあ…で、新聞はお悔やみ欄から見るというのも新鮮でした。だから、私を私より知っていて（笑）ああでもこうでも…になっているのがやっとわかりました。

飲み会でも雑談でも言ったことは翌日にはもうすべて伝わっていて、それもめちゃくちゃに歪曲されて「肥田野先生が言ってた」と根も葉もない話になるのです。最近は「うちのある職員に先生が夢中で、誘い続けて何度も食事に…」だそうで、この年になって浮いた噂はありがたい限りですが、私だけが知らないし、確かにうちは美女が多いのですが身に覚えがないのも不思議です。

そんなこともあって、しばらく不信の念が高まりましたが、考えてみればそんなもの勝手に言わせておけばよく、事実でも作り話、思い込みでも人は誤解・曲解・中傷するのが習性です。曾野綾子さんは「人の言葉ぐらいで不幸になるのはつまらないでしょ」と書いています。仮に「いい人だ」と言われたとしても、人は同じ口から手の平を返したように悪口を言っておとしめるのは誰でも経験しているはずです。こういう風土は人のことばかり気にするので、上を目指す余裕がなくなって、いつも現状維持の雰囲気になり、頑張る人は相手にされなくなりそうで、私のような怠け者にはちょうどいいと思うようになりました。私の友人も秋田県人ですが「女の言葉と涙は嘘だけど生身は本物ですから」と、ずっと前から「言葉なんか全然関係ない」という悟りの域に到達しています。

角館武家屋敷の椿

今日の診察室から㊾

男鹿みなと市民病院（男鹿市）
秋元　正年

原稿を依頼されてから、診察室にいて気になったことを少しまとめてみる。この医師会報を見ている方々の多くは、秋田県最大手の新聞「秋田魁新報」をも見ていると思う。私にとっても男鹿市を含め近郷近在の情報収集に役立っている。そして毎月第1、3日曜日掲載でチェックしているのが土崎出身の内館牧子さんの連載エッセイ「明日も花まるっ！」である。

この企画は約十年前に始まったが、内容は、かつて自身が手がけた小説や脚本であったり、県内の日常に触れたものであったりで、一つの読み物として楽しみにしてきた。2、3年前からは、ご自身も年を召して病を得たせいか、近い世代の方々の話や、病院を含む医療福祉関連の話題に絡んだ内容も多くなった。時には「そういえば、自分も…」と思い浮かべ、普段の診療にもつながりそうな気がして、今も目を通し続けている。

令和2年12月6日のタイトル『老人は幼児ではない』ではいずれも、年を召した方へのお願いやお知らせの伝え方について、自動車学校、病院、療養型施設で難渋した挙句に「幼児扱い」のような形になってしまった事例を紹介していた。

記事の中では、自動車学校でも、病院や療養型施設でも「緊張させないようにとか、話が理解できるようにとか、ほめてその気にさせよう等々を考えた結果」であり、「高齢者1人1人に合った対応は、実際問題として難しいだろう」と推察されていた。が、「ならばせめて『普通に話すこと…』を考えてもいいのではないか」と結んでいる。

私にも心当たりがある気がして、この一文が頭から離れなかった。

もともと声の通りが良くない私は、例えば、外来で病気や検査などの説明をするとき、より簡単に分かりやすく伝えようとして、悩んでいる。コロナウイルス絡みでマスク着用の上で進めなければいけなくなり、さらにやりにくくなった。

普段、診察室へ入ってきた方には、具合を聞いて、それで声のかけ方を修正しながら進めている。例えば、難聴が進んでいて、こちらの話す内容が届いてないと感じられた場合、補聴器をつけてもらったり、看護師や付き添いの方に間に入ってもらったりができると分かるとひと安心する場面が、十数年前の、当院赴任当初と比べて多くなった。そして補聴器や、間に入る方がいない場合は、話して伝えることを諦めて紙に書くか、メガホンなどを耳元へもっていき声を大きくして伝えている。

こうした場合、やはり、分かりやすさを考えて、かなりかみ砕いた内容で、時には「幼児扱い」と取られかねないような言葉が混じってしまい、不愉快になる方もいたかもしれない。

そして、最近、自分も何年、何十年か経てば逆の立場になるのか、とも考えるようになってきた。それを想定して外来で対応しなければいけないだろう。

次回は、お忙しい中、申し訳ありませんが、自治医大の先輩である古谷雅幸先生へお願いします。

ナイトキャップ

いつかは武勇伝

たむら船越クリニック（男鹿市）
田村広美

〜ほーら春先小紅　見に見に見に来てーね…

春は化粧品のCMソングに乗ってやってくる。右手はゲレンデ。色とりどりのスキーヤー。僕は、冬は雪合戦以外全くダメでスキーがうまい奴には嫉妬する。あの頃、スキーができないというのは致命的だった。大きなハンディを抱えた青春の日々…。大勢の三上博史が大勢の知世ちゃんと仲良くなるのを横目に、「ケッ、ナンパ野郎が」などとつぶやくのが精一杯。

車は、セリカGT-FOURのように華麗に雪を蹴散らし、ではなくノロノロとよく晴れた田沢湖高原を登っていく。

〜う〜ふふふ、ちやほやされて、う〜ふふふ、きれいになると、う〜ふふふ、う〜ふふふ、悪魔したくなる〜

残念ながらかわいい女の子に悪魔された経験なんてない。ましてや悪魔する才能もなく、実に彩りの乏しい青春時代を送った。原付バイクで大学に通い、道で女の子に声をかけることはできず、数合わせに呼ばれた合コンでも爪跡は残せない。ファッションは平凡。テニスもレギュラーにはなれず、進級はぎりぎりだった。

そんなオジサンは武勇伝に憧れる。本当のワルは困るけど、「ちょいワル」は魅力的だ。オジサンにとって「いい人」なんてのは、「面白くないやつ」と同義語にしか聞こえない。だから薫君も長倉和平も悩み続ける。

高原の行き止まりでUターン。「ねえ、おなか空いた」

助手席から、あの頃は原田知世ちゃんだった（?）奥さんが声をかける。おにぎりは、この頃僕がハマっている炊き込みご飯。今日は、きんぴらごぼうの素の乾燥野菜となめ茸、焼鳥の缶詰を入れて炊いてみた。いつものタコさんウインナーも。きらきら光る田沢湖を見ながら「美味しいね」。彼女はスキーもスケートもある程度できるらしい。

例年なみの観光客で賑わいマンボーどこ吹く風だった
角館武家屋敷（今年4月23日）

夕方、桜のラベルのビールで酔っ払い始めていると、「シンガポールチキンライスだよ」「へー、なんかすごいね」「実は、そこのスーパーでシンガポールチキンライスの素を見つけたんだ。このタレもついていたやつ。本物は、シンガポールの○○ホテル（忘れた！）のが有名なんだよ。いつか食べに行くんだからね」彼女のいつか行くところリストはどんどん長くなっていく。近くでは男鹿水族館のシロクマの赤ちゃんを見に行かなきゃいけないし、南紀白浜のパンダにも会いに行かなくちゃいけない。遠野のジンギスカン、大間のマグロにニューオータニのスーパーメロンショートケーキ。この間テレビで見た山の上ホテルの天ぷらも（行くところリストじゃなくて食べるものリストだ！）。サグラダファミリア、マチュピチュ、ウユニ塩湖…まだまだあるらしい。

オジサンはまだあきらめていない。自分で自分がカッコイイと思える瞬間、ちょっとだけ自分が輝いていると思える場面、自分の人生にささやかな武勇伝を付け加えたいと思っている。桜のラベルでも味は変わらないな、なんて思っているうちに空き缶が並ぶ。

あのリストに全部付き合ったら武勇伝になるんだろうか…。

〈酔〉

編集後記

▼この4月、日本の20代スポーツ選手たちが大活躍した。豪快な投・打・走の米エンゼルス大谷翔平、白血病から五輪代表に返り咲いた池江璃花子、東北福祉大卒の松山英樹は日本人初の米マスターズ優勝。それなのに新型コロナ第4波とワクチンで大人たちは迷走するばかり▼一方、アラスカ米中会談では中国共産党帝国に君臨する習皇帝の腰巾着らが大言壮語と多弁、易怒性を発揮、自国以外全部を敵に回す、あるいは金で操ろうとする多動傾向は躁病か。コロナ風に感染したミャンマーでも国軍が自国民に銃口を向け、世界も迷走…▼原稿〆切は3月末だった。が、桜が咲き始めた4月5日、笹尾先生の訃報が届き編集作業は中断、直ちに追悼文を寄せてくれた会員諸兄に感謝▼特別寄稿のあゆかわ氏は平成16年の『医療を考える集い』で会場を爆笑させて下さった。他、玉稿を賜った会員各位にも厚くお礼申し上げます▼昭和63年創刊の当会報は3号で平成を、今回で100号を迎えた。草創期は杉山和先生が編集されたようだが、編集後記はなく、7号に後記とコラムを書かれた鹿島幸治先生が初代編集長のようだ。その編集方針は当初から慣習や固定観念にとらわれない自由な型の模索だった▼浅利先生は『人物月旦』で神田茂先生を取材し

た際「弔辞じゃないから少々間違ってもかまわない」と励まされたが、編集子にも「追悼号なんて簡単でいい。人の生き死になどたいしたことではない」とか、「県医師会報は後ろのページから読む。前半はつまらない」「日医と県医の会報が医療行政の記事を載せているから郡市の会報では不要」「うちは同人誌でいい。型にはまるのが一番いけない」などと仰っていた。だが、型を破り自分たちで考え実行するのは容易でない。編集委員会の苦労、ここにあり…▼編集子が毎号お送りしている東京の恩師90歳より「人間の営みの中から、生命の糧、美しいもの、心に感動や豊かさをもたらすものを提供することが編集者の務め」と檄を賜った。委員会一同、肝に銘じたい▼旧日本軍は「兵力の逐次投入」でしくじったというが歴史は繰り返す。編集子の大学同期による大阪発コラム同様、当地でも医療関係者へのワクチン接種は大遅延、国民にもちびちび、五輪まで100日を切った日に国民接種率は1%弱だった▼次号発行は7月。英国型変異株N501Yは感染力が凄まじく致死率が高いようなので、新コロ感染対策分科会が求める行動変容ならぬ飲み方変容を実践し、白玉の「酒は静かに飲むべかりけり」と参りたい。101号にも原稿を宜しく。

（編集長・佐々木康雄）

中央保健所ワクチン会議
（3月10日）

ワクチン接種訓練
（3月18日　昭和公民館）

表紙説明

阿仁川の桜
（北秋田市阿仁合）
大日向かなえさん
（千葉克介写真教室）

2年前の5月3日、闘病中だった母方の祖父を励まそうと家族で阿仁合駅後ろの広大な河川敷公園に出かけ、お弁当を頂きました。車いすだった祖父は、コロナで世界が動揺し始めた翌年早々に亡くなったのですが、そのずっと前のこの日はとても上機嫌だったことを懐かしく思い出します。

花見客もまばらな公園を祖父の車いすを押しながら散策し、舞い散る花びらの道を撮影してみました。師匠の千葉先生、この1枚、いかがでしょうか？

（なお本誌の挿入写真も担当）

早く上野公園で花見ができるように…
（2018年3月）

お便りは　〒018―1401　潟上市昭和大久保字町後173―42
ハートインクリニック　佐々木　康　雄
医師会メールアドレス　info@oknmed.jp